

中国少数民族の子どもと漢語受容：新疆都市部における言語接触と人間形成

坂元，一光
九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門：准教授

アナトラ，グリジャナティ
九州大学大学院人間環境府教育システム専攻：博士課程3年

<https://doi.org/10.15017/7374768>

出版情報：国際教育文化研究. 8, pp.19-34, 2008-06-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



中国少数民族の子どもと漢語受容

—新疆都市部における言語接触と人間形成—

坂元 一光 アナトラ・グリジャナティ

はじめに

本論では中国の少数民族地域のひとつ新疆ウイグル自治区のウイグル族^①の子どもたちを中心とする漢語の受容過程について見てゆく。なかでもウイグル語と漢語の言語接触が日常化している都市部ウルムチを中心に、学校教育、地域・家庭生活における子どもたちの二言語運用の実態を紹介する。また「民考漢 (mín kǎo hàn)」^②と呼ばれる二言語使用者の事例を通して子どもの二言語使用と人間形成の関係についても触れてみたい。家庭や地域社会の日常において子どもの漢語受容はどのように進んでいるのか。また政策的受容としての学校教育場面における漢語の導入は、現在どのようにおこなわれているのか。ウイグル社会への漢語の流入は子どもたちのアイデンティティや民族意識の形成にどのような影響を与えるのか。これらの問題意識にもとづき、ウイグル語と漢語の言語接触が日常化している新疆の都市部ウルムチでの現地調査の成果をふまえながら若干の考察を試みる^③。

ウイグル語を母語とするウイグル族が集住する当該自治区において、近年、ウイグル語を中心とする言語生活のさまざまな領域において中国のマジョリティ言語である漢語の流入が見られる。自治区において民族言語の教育や使用は憲法等による法的保障のもとにあるが、近年の自治区地域の漢族人口の増加や教育政策における漢語導入の強化などの要因によって、特に都市部を中心に、民族語から漢語を中心とする言語環境への変化が見られる。本論ではこうした言語接触とそれにとまなう少数民族の子どもたちの言語環境の変容を、学校、地域、家庭など生活領域の多層的プロセスにおいて捉えるとともに、そこに浮び上がる言語生活上のさまざまな葛藤や亀裂について指摘していく。

1. ウルムチの言語環境とその変化—漢語の流入と導入—

新疆ウイグル自治区(総人口 2050 万人、そのうち少数民族は、約 1250 万人、漢族は 800 万人余り。『新疆統計年鑑』2007)はウイグル族を中心に、カザフ族、回族、キルギス族、モンゴル族、シボ族、オロス(ロシア人)族、タジク族、ウズベク族、タタール族、満州族、ダフール族、漢族など 13 の民族から構成される民族自治地方である。自治区を中心に 940 万人余りの人口を擁するウイグル族は、チュルク語系のウイグル語およびウイグル文字を使用する自治

区最大の少数民族である。ウルムチなどの都市部を除けば、人々の多くはタクラマカン砂漠の周縁に連なるオアシス地域に居住し、主に農業や商業に従事している。ほとんどはスンニ派のイスラームを信仰し、それは人々の日常生活全体のあり方をゆるやかに、また時には強く規定しながら方向付けている。

小論での調査報告の直接の舞台である新疆ウイグル自治区の区都ウルムチは、人口 201 万人余りを擁する政治・経済・文化の中心都市である。うち漢民族人口が 150 万人余りを占め（うちウイグル族は約 25 万人）漢化のすすんだ少数民族都市社会としての特徴を有している。しかし、ウイグル族と漢族の間の社会的、文化的境界は明確に維持されており、言語や宗教あるいは食生活などの差異化された日常実践をとおして自他の区分やわれわれ意識が不断に醸成されている。このようなエスニックな境界は民族文化の再生産を支える教育制度のなかにも存在しており、自治区内には漢族の教育を念頭においた漢族学校のほか、少数民族の子どもたちのために民族語で授業をおこなう民族学校がある。中国の民族自治区では民族文字や民族言語の使用をはじめさまざまな自治権が認められており、新疆においてもウイグル語を公用語として用いそれを公教育の場に導入する権利が保障されている。少数民族の子どもを対象とする民族学校は、民族文化（言語）の維持・再生産と民族アイデンティティの形成に大きな役割を果たしてきたと考えられる。しかし、近年、急速な漢語の流入による言語環境の変化を受けて、新疆の少数民族のあいだで民族学校ではなく漢語を常用する漢族学校を選択する傾向が強まっている。子どもたちを漢語学校に進学させる親たちが増えているのだ。また後述するように政府の双語教育政策によって民族学校においても漢語教育が強化されつつある。中国の経済社会動向は少数民族の言語生活において、これを漢語中心に編成していく流れの中にあり、新疆全体の社会的言語状況も漢語優位へと移行しつつある。こうした一連の言語動向のなかで自治区の政治・経済・文化の中心都市であるウルムチは、経済開発や漢語化の荒波を真っ先にそして真正面から被る地域となっている。

ウルムチにおける漢語受容は、便宜的に大きく社会生活全体における漢語「受容」と教育における漢語「導入」の二つの側面に分けて考えることができる。そしてこれら両側面は中央政府による国家統合の基本方針にそって相互に緊密に関連しながら全体の漢語受容の流れを形成している。前者に関しては、社会経済体制における漢語中心的編成がウイグル社会の漢語受容を促している。改革開放政策に端を発した経済の市場化や経済開発の推進、そしてそれにとともなう漢族の少数民族地域への大規模な移住などにより、少数民族はきびしい経済競争下に置かれるようになった。さらに莫大な経済投資をもたらす「西部大開発」の推進がこれに一層の拍車をかけている（加藤 2003：147-169）。市場経済や開発を主導する漢族資本により漢語中心の経済体制が導入され、漢語を中心とする産業や市場が広く展開するようになったのだ。今日の新疆の日常において漢語は、さまざまな生活領域に浸透している。

後者の教育における漢語の導入に関しては、国を挙げて展開される「双語教育」の推進が挙げられる。本来、民族語による教育を前提としていた民族学校において漢語あるいは漢語教育が強化されつつある。新中国成立以来、少数民族に対しては民族語による教育が奨励されていた（アナトラ 2005：174）。しかし、次第に民族学校における漢語教育も強化されていく。1982

年、当時自治区人民政府副主席であったバダイの「民漢兼通」(mín hàn jiān tōng)理念の提出によって「漢語教育の強化政策は、結果としてウイグル言語環境におけるひとつの転換期を画することになった」(リズワン 1999 : 54-55)。民族教育における漢語重視の政策は、その後も着々と積み重ねられ、1984 年には「中華人民共和國民族区域自治法」の第 37 条に規定された条文(「小学校高学年、または中学校に漢語の授業を設け、全国通用の普通話を推進する」)によりウイグル社会をはじめとするすべての少数民族社会において「漢語の優位が合法的に正当化され」る(リズワン同書 : 56) ことになった。こうした漢語強化の流れの中で、漢語を第二言語としてきた民族学校の教育も漢語を教授用言語とする方向へと次第に変わっていった。1992 年に新疆の中学校、高校に導入された理数系科目の教授用言語に漢語を用いる「双語実験班」は急速に増加し、当時の 3 校 3 クラス(アナトラ 2005 : 173-180) から 2003 年現在 105 校 294 クラスに拡大している(高莉琴等 2006 : 296-303)。高等教育機関においては、2002 年 9 月からウイグル文学など特殊な科目を除いて、教授用言語が漢語に一元化されている(アナトラ 2006 : 201-208)。さらに、2004 年 3 月、中共新疆自治区委員会・人民政府が「双語教育事業の大幅な推進に関する決定」を発し、少数民族教師の漢語レベルをさらに向上させるよう指示した。同年秋からは、新疆各地の「条件をみたら」民族小学校で、「語文」④の授業を一年生からおこない、算数の授業も三年生から教授用言語を漢語に切り替えて教えるようになった(アナトラ : 2007)。さらに、漢民族が多く居住している地域では、2007 年秋以降、三年生から算数だけでなく理科でも教授用言語を漢語に切り替えている⑤。

2. 国家統合における開発と漢語

これまで述べてきた漢語受容という現地(下)からのとらえ方に対しては、中国政府による上からの強い方向付けにも言及しておかなければならない。西部地域を対象とする経済開発や双語教育の推進には、中央政府による国家統合へ向けた基本方針が深く関わっているのはいままでもない。王が指摘するように「少数民族地域で経済開発を促進することは、経済統合を通して周辺民族の国家への帰属意識を強化することで民族問題の解決を図る、という中国政府の方針に即したものである」(王 2005 : 165)。同様の方針は民族教育にもつらぬかれている。中国の民族教育には本来的に矛盾する二つの方向性が含まれている(中島 1985)。すなわち、多民族国家における国民統合を達成するための「国民教育」としての方向性と民族言語や文化の保持を志向する「民族教育」としての方向性である(中島 同書 : 290)。前者においては国民として共有すべき国家理念やイデオロギー、知識の均質な普遍化が強調され(「一般化」)、後者では民族語の使用、民族教師の採用教育、民族性を尊重する教育内容など教育を少数民族地域の状況に適合させることが目指される(「民族化」)(同書 : 293)。しかし、近年学校現場で強化されつつある漢語(双語)教育は方向性の力点を「民族化」から「一般化」へと移すものである。現在の中国における民族教育あるいは最近の漢語強化の流れは、公式的な社会主義の理念というより国家統合というプラグマティックな目標にもとづいている(岡本 2001 : 97-103)。中国の民族教育は漢族を主体民族とする中華民族多元一体構造の理論(費 1988)にも根拠づけられつつ、また漢語優位の社会経済的状況とも強くリンクしながら少数民族自身に

よる漢語教育選択の傾向さえ生み出している。

現在、新疆ウイグル社会では社会経済活動におけるコミュニケーション手段としての漢語の需要が高まり、また双語教育の推進を通して民族教育における漢語の比重も高まることで、少数民族の子どもたちの生活世界を構成してきたウイグル語中心の言語環境は急速に変化しつつある。なかでも漢族人口が多数を占め経済・行政の中核都市であるウルムチには、こうした漢語受容の先進地域として子どもの言語環境における変化を先取りする実態が見出せる。

3. 生活場面における子どもの漢語受容

ウルムチの子どもたちの漢語受容の実態を具体的に把握するために、まず日々の生活における言語使用の様子を見ておこう。以下、アナトラ・グリジャナティの調査(2007)にもとづき、家庭と地域社会という二つの生活場面の言語使用状況を報告する。対象地区としてはウイグル族が多く居住し、後の部分で触れるA民族小学校の校区でもある南部のT団地をとりあげる。ウルムチは市の中心部を走る人民路を境として南北に大きく二つの顔を持っている。北に行くほど漢族中心の雑居区になっており、ウイグル族の住民は少ない。学校も民族クラスがある民漢学校を除けば、漢族学校が多数を占めている。これに対し、南に行くほど居住形態がウイグル族中心の雑居区になっており、漢族の住民は少ない。したがって漢族とは明らかに異なる顔立ちや服装の人びとが数多く見られる。建物などモスクをかたどったものが多く、またウイグルの民族音楽も流れて、町全体がエスニックな雰囲気醸し出している。民族学校の多くは、現在「民漢合校」(mín hàn hé xiào)^⑥となっている。そうしたなか、小学校の調査に通うためにT団地の知り合いの家庭に寄宿し、近隣の家庭や団地の公共空間での子どもたちの様子を観察した。

(1) 地域社会における言語使用

家庭と地域社会という二つの生活場面の言語使用の実態に関しては、A小学校に通う子どもたちが多いT団地とその家庭を対象とした。この団地住民はウイグル族がほとんどで漢族は少ない。T団地は2003年に建設され、経済階層的には公務員やビジネスマンなど中高層に属する住人が多い。団地の周辺には、ウイグル族が経営する病院、スーパー、本屋、床屋、ファミリーレストラン等がある。団地に住んでいる子どもたちは基本的に近くの三つの小学校のどれかに通うことになっている。ひとつは漢族小学校、もうひとつは参与観察を行なったA小学校、もうひとつは、大学付属の「民漢合校」の小学校である。

毎日、夕方になると三つの学校から帰宅した子どもたちが大勢団地の遊び場集ってくる。そこで子ども同士の会話に耳を傾けていると、時々単語レベルで漢語が混ざったりする以外、ほとんどウイグル語で会話をしている。漢族の子ども同士と一緒に遊んでいる様子は見かけない。団地内や付近の商店などはウイグルの人の経営する店が多く、子どもたちが買い物をしたりするときも漢語を必要としない。しかし、漢族の店に行ったときには子どもたちは漢語を使って買い物をする。ただ、それは正しい発音や声調とはいえず、文法も間違ったりするが、漢族の店主には通じている。

例えば、団地のすぐ外の漢族が経営する商店にウイグル族の子どもたちが牛乳や野菜を買いにきた時のことである。子どもたちは「牛奶 niú nǎi」(牛乳)、「西红柿 xī hóng shì」(トマト)、「辣子 là zi」(ピーマン)など品物の名前は漢語で伝える。しかし、「买牛奶两个 mǎi niú nǎi liǎng ge」(本来なら「买两袋牛奶 mǎi liǎng dài niú nǎi [牛乳を2袋買います]」)とウイグル語の語順で表現する場面にしばしば出会った。また、漢語では数量詞を正しく用いることが重要だが、子どもたちは袋入り牛乳に「个 ge」(個)という量詞を使っている。こうした誤りは子どもだけではなく、大人の間でも頻繁に見られる。しかし、大人も子どもも限られた漢語能力の範囲で不自由なく日常生活を送っている。

南部とは対照的に北部の住宅街や団地では漢族が多く、ウイグル族は少ない。例えば、D大学区の宿舍(規模はT団地より大きい)におけるウイグル族の子どもたちの言語使用ではT団地の子どもたちに比べてさらに「混合語現象」が顕在化しているように思われた。子ども同士の会話だけを聞いていると漢語ネイティブの子どもだけのようだが、実際には漢族もいればウイグル族もいる。ウイグル族同士の会話においても、ウイグル語より漢語がより多く登場する。例えば、筆者(グリジャナティ)がある子どもにウイグル語で「Apingiz barmu? (お母さんいますか?)」と声をかけたところ、その子は漢語半分ウイグル語半分で次のように返事をした。「Apam 在家做饭 [zài jiā zuò fàn] kiliwatidu. (お母さんは家でご飯を作っている。)」(下線はウイグル語の和訳) このように、地域の言語環境の違いも子どもたちの漢語使用のあり方に影響を及ぼしているように思われる。しかし、いずれにしても子どもたちの地域での生活言語のなかには漢語が浸透しつつあるようだ。

(2) 家庭における言語使用

今回、訪問したのはすべてT団地に居住しているウイグル族の家庭である。それぞれ父親が大学の教員で母親が公務員の家庭。両親とも公務員の家庭。父親がビジネスマンで母親は主婦の家庭。両親とも警察官の家庭などであった。これらの家庭を訪問し、子どもを中心に家族間の言語使用の様子を観察した。これらの家庭では親や兄弟姉妹との会話あるいは兄弟喧嘩などはウイグル語で行なっていた。しかし、どの家庭にでも多少ウイグル語と漢語の「混合語現象」がみられる。テレビ、冷蔵庫、携帯電話、パソコンなどの名称の場合は、漢語を用いることが多い。このような新しい電気製品や電子機器に関しては、「新疆语言文字委员会」がウイグル語の訳語を「新疆日報」に定期的に載せている。しかし、ウイグル語の訳語は子どもたちや大人の間には定着せずに、漢語を用いることが一般的である。したがって、親が子どもに何か手伝いをさせるときにもその会話に漢語が普通に混ざり込む。次の漢語名詞+ウイグル語動詞のような二言語の混合的会話はどの家庭でも普通に耳にする。さらに、ウイグル語に混ざりこんだ漢語の声調は無視され、ウイグル語のアクセントによる発音になっている。「电视 [dian shi] ni oqurwet」(テレビを消して)、「冰箱 [bing xiang] ni yepiwet」(冷蔵庫を閉めて)、「辣子 [la zi] bilen 茄子 [qie zi] ekire」(ピーマンと茄子を買ってきて)、「手机 [shou ji] rimni eliwete」(私の携帯電話を取ってくれる)。「教委 [jiao wei] ge berip keley」(教育庁に行ってくるね。)ウイグル族の親子の会話に漢語が混ざり込むのは日常的な現象であり、それを人びとは当

然のこととして受け入れている。

またラジオやテレビなどのメディアに着目すると、子ども向けラジオ放送では、漢語のスピードが速いため、聞き取りが難しく、ウイグル語による放送を利用する率が高い。テレビでは各チャンネルに子ども向けの番組があり、そのほか「Kar Leylisi (雪蓮 xuělián)」という子ども専用チャンネルもある。このチャンネルは、毎日 12 時間放送しており、そのうちウイグル語による放送は 4 時間である（残り 8 時間のうち、漢語による放送は 4 時間、カザフ語による放送は 4 時間である）。ウイグル語による放送では、ウイグルの昔話や伝統文芸にもとづく番組、外国のアニメをウイグル語に訳したものなどが放送されている。子どもたちは、面白い番組であれば、内容を完全に理解できなくとも漢語の番組を見るという。また、漢語のヒアリング能力を高めるために、親から言われて毎日特定の時間内で漢語の番組を見る場合もあるという。家庭によって漢語番組の視聴時間が異なっているが、新疆テレビ局のある担当者はウイグル語の番組の視聴率が遥かに高いと述べていた。

育児やしつけの場面でも漢語とウイグル語の混合が見られるが、なかにはウイグル語によってしか伝えられない場合も多い。すなわちその内容が民族言語や文化（イスラーム）に深く関連している場合、ウイグル語でしかそれを適切に表現しえないのだ。例えば、食事の際によく「Nanni qaqmay ye, dessilip ketse yaman bolidu。(アッラーが与えてくれた) パンは残さず落とさず食べなさい、落としたものを踏んではいけない」と子どもに言い聞かせる。この場合、「してならない」という意味を表す「yaman bolidu」は、コーランの規定に反する行為として「してはならない」のであり、その正確な意味を漢語に直訳することはできない。たとえ漢語に堪能な民考漢の家庭でも食事前の「Bismillahirrahmanurehim (日本語の頂きますに相当する)」や、食後の「Xukri (アッラーが与えてくれたすべてのことに満足と感謝の気持ちをこめて) ご馳走様でした」と言うよう子どもをしつける。また学校に行く子どもに対しては「Alla ge amanet」、「Huda yimge amanet」と言って送り出す。そこには子どもの安全や学習、その他の一日の活動が順調に行くよう「Alla=Huda」(アッラー=フダ)に願う内容が含まれている。

このようにウイグル族の家庭での育児やしつけで親が用いる表現や教える振舞いの多くは、宗教規範や文化的価値観と深く結びついており、これらはウイグル語を通してのみその正確な説明やニュアンスの伝達が可能である。なぜならば言語にはその社会、民族の文化が織り込まれており、したがって文化化のプロセスもそうした民族語を通してはじめて可能になると考えられるからだ (渡邊 2004 : 131)

4. 教育場面における漢語導入 - 小学校における双語教育 -

現在中国では、計 21 の民族言語を用いて、全国一万ヶ所余りの小中学校で双語教育が実施され、在学生は 600 万人余りに達している。しかし、地域あるいは民族集団によって双語教育の実施状況はそれぞれ異なっており抱えている問題も複雑である。

A 小学校は、ウルムチ市でもウイグル族が集中している地域に位置しており、特に南新疆など他の地域から商売関係で移住してきたウイグル族の子どもが比較的多く入学している。彼ら

は、漢族との接触は少なく、就学前の漢語学習経験もあまりない。この学校は、1949 年創立以来、少数民族（そのほとんどがウイグル族）の子どもたちが通っている民族小学校である。2004 年 9 月から元々あった 1 学年 6 クラス（1 クラス約 40 人）に二クラスの漢族児童を加えて「民漢合校」をつくり、それと同時に「新たな双語教育」^⑦もスタートした。中国における双語教育の推進は学校教育における漢語の受容（導入）を最も具体的に示すものとなっている。教職員は約 100 人おり、そのうち漢族クラスの授業を担当している漢族教員は 10 人、民族クラスの漢語科目を担当している「民考漢」（民族語・漢語のバイリンガル：後述）教員は 3 人で、その他はウイグル語を母語とする教員である。A 小学校の「算数」と「語文」の授業^⑧から、教育現場の漢語の導入について「双語教育」の実態を通して見て行こう。

(1) 二年生の「語文」授業

A 学校では、二年生の「語文」授業は「民考漢」の教員が担当しており、教材は、「語文」の「下冊」（下巻）を使っていた。教師は授業を標準的な漢語の挨拶から始め、まず漢字の読み聞かせの授業をおこなっていた。5 人の子どもに黒板に漢字を書かせ、それを訂正するときには漢字の書き順から発音まで丁寧におこなっていた。授業は可能な限り漢語を用いておこない、子どもたちが理解しにくいと思うところではウイグル語による説明を加えた。個々の単語の説明においては、漢字を丁寧に、書き順を強調しながら黒板に書き、単語の学習と短文を作る練習をさせていた。またそれらの意味をウイグル語で補足説明をし、子どもたちが作った短文をウイグル語に直す練習もしていた。その間、子どもたちの発音を細かく訂正し、書き順をチェックした。

続いて、教師が漢語で前日勉強した李白の「静夜思」という詩を暗唱するように指示した。子どもたちの反応がないため、同じ内容をウイグル語で繰り返した。すると全員が詩を暗唱しはじめた。しかし、教師が内容を確認するとそれを漢語で説明できる子どもはいなかった。例えば、「疑是地上霜 Yí shì dì shàng shuāng」（地上に降りたのは霧か）という李白の詩の一節を教師が漢語を用いて単語一つ一つにわたって説明しても、子どもたちはその全体の意味が理解できない。また、授業の別のところでは教師が「泉水 quán shuǐ」（泉の水）という比較的簡単な漢語の説明に苦労していた。子どもたちはその語を漢語で説明されても、それが水道の水なのかミネラルウォーターの水なのかあるいは泉の水なのかよく理解（イメージ）できない様子であった。そこで教師はウイグル語の訳語「bulak suyi」（泉の水）を使うことによってようやく子どもたちに理解させることができた。

こうした授業の進め方について教師は「学校側はできるだけ漢語を中心に授業を進めることを求めている。しかし今の時点でその通りにすることは難しい。子どもたちの漢語レベルは様々であり、1 クラスにまとめて授業することが難しいからだ。なぜならば、この学校には南疆出身の子どもが多く、彼らのほとんどは祖父母に育てられたため、就学前の漢語教育を受けていないからだ。ウイグル語も使わないと漢語ばかりでは授業が成立たない。日常の言葉ができて授業の「語文」についていける子どもはいない。漢語の学習時間が短い子どもにはこの教材は難しすぎる」と語っていた。

(2) 三年生の「算数」授業

算数の授業は、長さや厚さを測る単位についての内容であり、漢語の研修を受けてきたばかりのウイグル族の教師が双語で授業をしていた。教授法は現在最も重視されている「直接法」であり、出来るだけ漢語を使うように努力している。教科書はこれまで漢族用の教科書を民族語に訳したものを使ってきたが、今は漢族用の教科書をそのまま使用している。板書にはすべて漢字が使われている。授業中、教師は出来るだけ漢語を使うようにしている。但し、教師が漢語で表現することに限界を感じた場合、適宜ウイグル語に切り替えている。

授業は「長度 cháng dù (長さ)、厚度 hòu dù (厚さ)、寬度 kuān dù (広さ)」などの用語の学習であった。最初に教師は漢語で子どもたちに質問をはじめた。

「1 米等于几分米? Yīmǐ dēngyú jǐ fēnmǐ」(1メートルは何デシメートルですか)

「1 分米等于几厘米? Yī fēnmǐ dēngyú jǐ límǐ」(1デシメートルは何センチメートルですか)

「1 厘米等于几毫米? Yī límǐ dēngyú jǐ háomǐ」(1センチメートルは何ミリメートルですか)

「书的厚度用什么单位衡量呢? Shū de hòudù yòng shénme dānwèi héngliang ne」(教科書の厚さはどの単位で測りますか)

漢語での質問に積極的に手を挙げて答える子どもはなかったが、同じ質問をウイグル語で繰り返すと手を挙げて答える子どもが数人出てきた。授業の最後に教師が「今天我们学了什么? Jīntiān wǒmen xué le shénme?」(今日はどういう内容を勉強しましたか、みなさん漢語で答えなさい)と聞き、さらに「要用汉语回答, 知道了吗?」(かならず漢語で答えるんだよ。分かりましたか)と再三念を押した。にもかかわらず、子どもたちはウイグル語で「Biz santimetir millimetirni ugenduk」(私たちは、センチメートルとミリメートルを勉強しました)と答えていた。教師は再び「用汉语回答! Yòng hànyǔ huídá!」(漢語で答えてください)と指示した。すると、ようやく意味を理解したという顔で、子どもたちは大きな声で「我们毫米、厘米学了。Wǒmen háomǐ, límǐ xuéle。」(本来の漢語の語順なら、我们学了毫米和厘米。Wǒmen xuéle háomǐ hé límǐ)と答えた。それはウイグル語の語順に漢語の単語を入れ込んだ答え方であった。

算数の授業では「厚さ、長さ、横、縦」などの基本的な用語を漢語でどう表現するのかさえ分からない子どもたちが多数を占めているため、45分の授業のなかで、算数の専門用語の勉強をさせたり、漢語で行った授業をウイグル語で繰返し説明を加えたりしている。こうした授業形態は、授業の質やその進み具合にも影響を与え、同じ学年の漢族クラスと量的・質的格差を生み出すのではないだろうか。また授業以外の場面で子どもたちが使用している言語を聞いてみると、教員との会話や子ども同士の会話はすべてウイグル語で行なっており、漢語の出現は非常に少ない。漢語を使った授業で、子どもたちが教師の質問に対して漢語で反応しないのは、学習内容についていけないだけではなく、馴れない言語表現へのとまどいもあったと思われる。

「語文」と「算数」の二つの事例から民族学校における漢語導入の実態の一端を見ることが出来る。A小学校はウルムチ市のウイグル族の集住する地域に位置し、都市部の標準的な民族小学校のひとつである。そこでは「民漢合校」化や双語教育の実施、「民考漢」教員の配置やウイグル族教員の漢語研修派遣など漢語導入に向けた積極的な取り組みが見られる。そうした体制のもとで、「語文」や「算数」の授業が実施され、子どもたちも熱心に学習に励んでいた。しか

し、教室の様子からは学校現場、特に民族学校における漢語の導入に関して、いくつかの課題や不安も見えてくる。ひとつは教授用言語に漢語を用いることによる子どもたちの学習達成の限界である。語文でも算数でも教室では教員が適宜ウイグル語を交えて授業をおこなわざるをえず、それは母語のみによる授業に比べて、確実に科目自体の学習効果を阻害している。また教師の側の問題として授業における漢語力不足がある。算数の授業に見られたように、たとえ研修を受けた後でも、ウイグル語を母語＝教授用言語としてきた大多数の民族教員にとって漢語で授業をすることは大きな負担であることがうかがえる。授業や学習におけるこうした課題を抱えたまま、限られた時間（45分）のなかで用語の漢字表現や二言語を交えて内容説明をおこなわねばならない双語教育の実態を見ると、子どもたちは漢語能力と引き換えにその学習達成を犠牲にしかねない不安がある。それは最終的には民族学校の子どもと漢語学校の子どもの間での教育格差の再生産へとつながっていく懸念をいだかせるのだ。

5. もうひとつの漢語受容の形態－民考漢とアイデンティティ形成－

前節における民族学校における漢語導入に対し、一般の漢語学校に進学しさらに徹底した漢語環境に身をおくことでより積極的に漢語を受容している子どもたちが存在する^⑨。彼／彼女らは「民考漢」と呼ばれ、ウルムチなどの都市部を中心に増加しつつある。これは上で見たウイグル族の子どもの学校教育をとおした漢語受容のさらに徹底した形態と見なすことができ、また漢語受容と子どもの人間形成との関係性を考えるうえでの貴重な手がかりとなる「言語集団」である。さらに彼／彼女らが体現する言語生活や経験は、拡大し変化つつある新疆の二言語状況の先端部分を示すとともに、少数民族地域の人びとの言語生活の未来を占う指標でもある。

もともと民考漢は、小学校時代から漢族学校で教育を受け大学入試を漢語で受験した少数民族学生に対する呼称であったが、その後、漢族学校に通うすべての少数民族学生にこの呼び名をあてるようになっていった。したがって、現在では小・中学校まで漢族学校で学び、大学まで進学せずに社会に出た学生も同様に民考漢と呼ばれている（シェリンアイ2001：61）。この民考漢に対し、2節で取り上げた民族学校において教育を受け大学入試も民族語で受験した少数民族学生は「民考民」と呼ばれている。民考漢は1950年代中後期には、すでに新疆の都市部ウルムチに登場していた。60年代、70年代には地方都市や農村の子どもたちも多く漢族学校に入るようになり、各地域社会においてより有利な職業や地位を獲得するようになった（ディムラティ1996：20）。以来、漢語中心の社会経済状況や民族教育政策のなかで民考漢の子どもは年々増加している。これまで少数民族の子どもたちの多くは民族学校に通っていた。教育における民族的、言語的な住み分けがなされていたのだ。しかし、漢語を中心とする社会経済体制と双語教育の強化にともなう少数民族社会への漢語の流入が加速化するにつれて、漢族主体の漢語学校を選択する少数民族の子どもたちが増えていった。教授用言語の違いによる教育的住み分けにも流動化が生じるようになったのだ。こうして少数民族地域の学校教育は、マクロな社会・経済的要請および中央政府の少数民族言語教育政策における漢語重視傾向を反映し、相対的に漢語教育に有利な状況を呈している。漢語重視あるいは漢語バイリンガルの推進は、漢語優位

の社会経済的状況とも強くリンクしながら、少数民族における漢語教育選択の流れを生み出している。少数民族の立場で漢族学校を選択する民考漢の増加は、このような漢語を中心とするマクロな政治的、経済的、そして教育的文脈のなかに位置づけられている。

漢族学校において教育を受けることにより高い漢語能力を達成した民考漢の子どもたちは、その後どのような人間形成のあり方を見せているのだろうか。ウルムチの民考漢は、一般に漢語をまず漢語に囲まれた生活環境のなかで自然に獲得し、その後、学校教育によってこの能力をさらに熟達させることが多い。シェリンアイによればウルムチの民考漢の多くは、普段の生活環境はもとより、学校でも常に漢族の生徒や友人たちに囲まれて成長しており、むしろ自民族との交流の機会はそれほど多くない。民考漢にとって自民族との親密な交流は、大学入学後、就職或いは結婚による生活圏の拡大や変化のなかでようやく本格化するといわれている（シェリンアイ2001:63）。こうした言語環境での成長過程は集団間関係やエスニックなアイデンティティ形成とどのように関連するのだろうか。

漢語の社会経済的優位性が強い現在の新疆の言語環境において、一般に民考漢はそのような社会のあり方や変化に適応性の高い人びととして肯定的な評価を与えられている。しかし、こうした肯定的な社会経済的評価とは別に、特に自民族（民考民）の間では民族言語や文化に関わる評価において異なる見方が示される。仲間の社会経済的達成に対するナイーブな反発やウイグル語や慣習における「ウイグル人らしさ」の喪失が同じエスニック集団内部に見えない境界を生み出しつつあるのだ。言語使用における母語の不完全さもひとつの大きな要因である。

我われがバイリンガルというとき、ややもすると母語と第二言語の両方に通じた熟達者を思い浮かべることが多い。だが現実にはバイリンガルと見なされている（あるいは自認し）人々の間で、二つの言語の熟達度や運用形態においてさまざまな実態が見られる。例えばウルムチの民考漢の言語運用等の様子を細かく見てゆくと、個々に多様な実態（不均衡）をあらわすことが指摘されている（シェリンアイ：2001）。その二言語運用の実態に注目すれば民考漢は必ずしも同質的な言語集団とはいえないことが分かる。ウルムチの民考漢の場合、全体として母語能力より漢語能力が高く、日常の実用言語として漢語を用いる傾向が見出せる。彼／彼女らの母語を中心とする自民族との会話のなかでは自然に漢語が混在し、どちらかといえば漢語によって会話を主導せざるをえない現実が見られる。読み書き能力では漢語主導の不均衡がさらに拡大する。民考漢における二つの言語間の習熟度合の不均衡は、現地言語の全体的な勢力関係を知るためのひとつの指標を示している。とくに、相対的に母語の能力が劣る傾向が見られる場合、それはいわゆる社会全体の言語移行（language shift）にもつながる可能性をはらんでおり、当該社会における少数民族言語の行方を考える上でも重要と思われる。

さて自分たち（民考民）と共通の文化的出自を持ちながら、自民族の言語は不完全な上に漢語だけでなく漢族の思考や振る舞いを身に着けた民考漢に対しては「（新疆の）14番目の民族」という別称も流通している。民考漢の存在感の高まりはそれまでのウイグル族と漢族の間にあったエスニックな境界を曖昧化するとともに、ウイグル族の内部にも新たな境界を生み出しつつある。自民族による民考漢に対する評価には、社会の市場化や産業化、情報化にいち早く適応した有能な自民族（ウイグル族）という肯定的なものと、民族の言語や習慣が十分に身につ

いていないウイグル族としての真正さを欠く人々という否定的な評価の両面が見られる。民考漢の活躍や社会経済的達成が常態化するようになるにつれ、人々の間では彼／彼女らに対する差異化された両価的評価とそれにもとづく集団的な他者化（線引き）の動きがあらわれる。ウイグル族の内部では民考漢に対し新たに差異化された集団範疇（14番目の民族）も与えられつつある。それとともに一部ではそれまでのウイグル族とは異なるアイデンティティを持つ民考漢も現れている。なぜならモノリンガル（漢語あるいはウイグル語）であろうがバイリンガル（民考漢）であろうが、他者と異なる言語は、それを用いる人びとの間に結束や帰属意識を生み出すからだ（宮岡1996：36）

おわりに

本論では中国の少数民族地域のひとつ新疆ウイグル自治区の言語接触とそれにもなう言語環境の変化について、ウイグル族の子どもたちを中心とする漢語の受容過程を通して概観した。ウイグル語と漢語の言語接触が日常化している都市部ウルムチ市のなかでも、特にウイグル族の集住地区を例として地域・家庭生活、学校教育における子どもたちの漢語使用あるいは二言語使用の実態、そしてそのアイデンティティ形成との関係について考察を試みた。現在、漢語は経済開発や教育政策に連動しながら少数民族社会にも急速に流入している。この現象は子どもの生活領域においても例外ではなく、特にウルムチ市のような都市部に暮らす子どもたちの場合、漢語はテレビやマンガ雑誌などのメディア環境から家庭や地域の人びととの日常的交流まで、生活のあらゆる場面に登場し、また漢語をおりまぜて会話することが常態化している。子どもたちの生活の大きな部分を占める学校（民族学校）においても教授用言語として漢語が用いられるようになっており、学校教育における漢語の政策的、組織的な導入が加速している。ウルムチの少数民族の子どもたちは日常生活のあらゆる場面で漢語にさらされており、その受容はいわば生活の多層化したプロセスとして進んでいる。

しかし、こうした漢語受容は決してスムーズな過程というわけではなく、広く教育全般あるいは文化化（enculturation）の過程でもさまざまな葛藤や亀裂が浮び上がっている。漢語はそのコミュニケーション手段としての利便性から日常生活のなかに積極的に取り入れられ、それは親子間の会話においても同様である。一方で、文化（宗教）に深く結び付いた知識や振舞い方を適切に説明するには漢語よりもウイグル語を用いる場合が多い。例えばイスラームの規範や価値観を反映したしつけや教育の内容に関しては、とくにウイグル語に頼らざるを得ない表現が多く漢語表現の限界が明らかになる。学校教育においても漢語を教授手段とする十分な準備が整っているとはいえず、その不利な学習環境が将来の教育（言語）格差の再生産につながるものが懸念される。一方、漢語受容は子どもたちのアイデンティティ形成にも少なからぬ影響を与えることも予想される。言語選択とアイデンティティ形成に関しては小野原が指摘するように「ある言語を自らの意思で選択して使う場合と、自らの意思に反して特定言語を選択・使用せざるを得ない状況とではアイデンティティの形成や確認の仕方は全く異なる」（小野原2004：5）。ウルムチの場合も、最初から漢語学校を選択する民考漢の子どもと民族学校で双語学習を受けている民考民の子どもが混在しており、それぞれの言語使用とアイデンティティ形

成の関係も異なってくることが予想される。また、漢語学校への進学を選択する子どもの増加によって、一部では新しい子どものバイリンガル集団も生み出されつつあり、それにとまなう子どものアイデンティティの流動化もうかがわれる。

現在のウルムチにおける子どもの言語環境が、不安定で過渡的な状況に置かれているのか、あるいは新しい段階へ向けた言語環境の再構築の途上にあるのか、立場によって議論の分かれるところである。しかし、少なくとも自文化や民族言語への愛着を意識しまたそれに依存しながら生きる人びとがいるかぎり、あるいは民族言語に対する保障が国家的基本理念のなかに公式に表明されているかぎり^⑩、今後とも少数民族言語と漢語の関係に対しては注視していく必要がある。「少数民族学生は母語や文化を伝承する権利を有するだけでなく、各民族の言語や文化の教育結果のなかで競争力を高める権利も有する。そうでなければ中国の言語と文化の多様性は机上の空論に過ぎない」という王軍(2007)の指摘にあるように、中国社会において持続可能な多民族・多言語環境を構築していくためには、漢語や双語教育の普及のみならず少数民族の言語保障の実質化に向けた配慮と取り組みが重要と考える。

-
- ① 本文の記述においては少数民族、ウイグル族、漢族などの用語を用いるが、これらは中国民族政策の基点である「民族識別工作」によって行政的に認定されたいわゆる「公定民族」、社会範疇である。この社会範疇は人々によってさまざまな生活場面において状況に応じ用いられており、自他関係や自己のアイデンティティを構築する際の重要な参照枠や手掛かりを提供している。
- ② 民考漢はもともと、小学校時代から漢族学校で教育を受け大学入試を漢語で受験した少数民族学生に対する呼称であったが、その後、漢族学校に通うすべての少数民族学生にこの呼び名をあてるようになった。この民考漢に対して民族学校で教育を受け大学入試も民族語で受験した少数民族学生は「民考民」として呼び分けられている（以下、本論では文脈に応じて民考漢以外のウイグル族を「民考民」と表記する）
- ③ 小論は坂元とアナトラ・グリジャナティによる分担執筆による論考である。坂元は、「はじめに」、「1 節」、「2 節」、および「5 節」を主として担当した。アナトラ・グリジャナティは、「3 節」、「4 節」を主に担当した。「おわりに」の部分と全体の最終的調整は兩人で意見交換をしながらおこなった。最終的な文責は坂元がこれを負う。
- ④ 「語文」とは、日本の「国語」に当たる科目である。
- ⑤ 乌鲁木齐晚报 《乌市出台双语教学实施意见 今秋小学民语系三年级科学学科有望使用汉语授课》2007 年、8 月、29 日、A05
- ⑥ 2000 年のはじめから少数民族地域を中心に、少数民族児童・生徒の双語教育に有益な言語環境をつくろうという目的で、漢族学校と民族学校の二校を合併し、1 人の校長により管理運営される「民漢合校」プロジェクトが推進されている。
- ⑦ 近年まで、新疆におけるウイグル族を対象とした双語教育の教授用言語はウイグル語であり、漢語は 1 つの科目として位置づけられていた。つまり、漢語を第二言語とする双語教育が推進されてきた。これに対し、現在は教授用言語を漢語に切り替えようとする教育改革が進められており、アナトラ・グリジャナティはこうした双語教育を従来の双語教育と区別して「新たな双語教育」と呼んでいる。
- ⑧ 従来、民族学校では、漢語はひとつの科目として設けられ「漢語」という教科書を使用されていた。教授法としては翻訳法が使われてきた。したがって文法知識や言葉の意味などは

ウイグル語で説明されていた。漢語の単語量がまだ少なく、文化的・歴史的予備知識を持たない子どもたちに漢族学校で国語として教えられている「語文」の授業は理解し難い科目であり、それを教えることによって彼らの漢語レベルを向上させることは現時点では難しいと思われる。

- ⑨ 以下の民考漢をめぐる記述は、坂元とシェリンアイとの共同研究報告書（坂元&シェリンアイ 2007）にもとづいている。
- ⑩ 中国の少数民族言語政策の基本的な枠組みは、50年代に確立されたといえる。1949年に制定された「中国政治協商会議共同綱領」およびこれを土台に制定された1954年の最初の憲法は、いずれも「各民族はすべて自己の言語文字を使用および発展させる自由を有する」と定め、少数民族言語政策の遵守すべき基本的な理念を明らかにしている。少数民族の言語に対する保障は、公務、教育、訴訟など様々な領域にわたっている。教育に関しては、政務院の批准による「第一次全国民族会議に関する報告書」（1951）の中で「少数民族教育における言語問題に関しては、現在通用文字を持っている民族の小学校と中学校（高校を含む）の各種教科は、必ず自民族の言語文字で教学しなければならない」と規定されそれは「大躍進運動」や「文化大革命」時期を除き今日まで生きている。

現在、少数民族の言語政策では、民族言語に対する尊重と漢語の普及がともに重視されている。例えば、憲法の第4条に「各民族はすべて自己の言語文字を使用及び発展させる自由を有する」、第19条に「国家は、全国に通用する標準語を普及する」とある。一方、民族区域自治法では「民族自治地方の自治機関が職務を遂行するときは、当該民族自治地方の自治条例の規定により、当該地域に通用するひとつまたは複数の言語文字を使用するものとする。同時に複数の通用言語文字をもって職務を遂行するときは、区域自治をおこなう民族の言語文字を主たるものとすることができる」（第21条）として民族言語の使用を自治権のひとつとして位置づけている。

学校における少数民族言語教育については、区域自治法は「少数民族学生を主たる学生源とする学校またはクラスおよびその他の教育機関においては、条件が許す限り少数民族の教科書を採用し、かつ少数民族の言語で教学しなければならない。状況に照らし、小学校の低学年または高学年から漢文科目を設け、全国通用の標準語と標準漢字を普及するものとする」（第37条第3項）ように定めている。すなわち、少数民族の言語文字による教育を主として、漢語教育を補完的におこなう方針が明確に示されているのだ。この規定は2001年の第九回全国人民代表大会常務委員会第二十次会议<<関与修改<中華人民共和国民族区域自治法>的决定>>（中華人民共和国民族区域自治法の改正に関する決定）においても変わることなく維持されている。また2000年に公布された<<国家通用言語文字法>>では、漢語と規範漢字は全国における通用言語として法的に位置づけられ、同時に第8条では、「各民族は自己の言語文字を使用し、発展させる自由を有する」と改めて強調されている。さらに、「少数民族言語文字の使用は憲法、民族区域法および他の法的規定を依拠とする」と補足されている。

<参考文献>

日本語

- アナトラ・グリジャンティ 2005「新疆ウイグル自治区におけるバイリンガル教育について—地域格差を中心に—」『九州教育学会研究紀要』第33巻、九州教育学会
- 2006「中国新疆ウイグル自治区における双語教育の現状と課題について—高等教育を

中心にー』『九州教育学会研究紀要』第34巻、九州教育学会

———2007「中国新疆ウイグル自治区における双語教育の発展動向について」『財団法人 福岡アジア都市研究所 若手研究者研究活動助成報告 平成18年度』財団法人 福岡アジア都市研究所

———2007「中国新疆ウイグル自治区における双語教育の新たな動向ー初等教育を中心にー」、比較教育学会、第43回大会、発表資料

岡本 雅享 1999『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社

———2001「中国のマイノリティ政策と国際規準」『現代中国の構造変動7（（中華世界ーアイデンティティの再編）』岩波書店

小野原 信善・大原 始子 2004『ことばとアイデンティティーことばの選択と使用を通してみる現代人の自分探しー』三元社

王 柯 2005『多民族国家 中国』岩波書店

加藤 弘之 2003「「西部大開発」の現状と課題」『地域の発展ーシリーズ現代中国経済6ー』名古屋大学出版会

坂元 一光&シェリンアイ・マンティ 2007「中国少数民族の言語と集団間関係の新局面ー新疆ウルムチの「民考漢」を中心にー」九州大学大学院教育学研究紀要 第9号

ディムラティ・オマル 1999「新疆の「民漢考」とカザフスタンの「民考俄」」（西原明史訳）『中国新疆及びカザフスタンにおける少数民族文化の持続と変容に関する基礎的研究』（課題番号07045008）

中島 勝住 1985「中華人民共和国における少数民族教育問題」『多文化教育の比較研究ー教育における文化的同化と多様化ー』（小林哲也他編）九州大学出版会

宮岡 伯人 1996『言語人類学を学ぶ人のために』世界思想社

渡邊 己 2004「北アメリカ北西先住民にみる言語とアイデンティティ」『ことばとアイデンティティーことばの選択と使用を通してみる現代人の自分探しー』（小野原信善他）三元社

リズワン・アブリミティ 1999「新疆における漢語教育の展開とその背景ーウイグル人を中心にー」『福岡発・アジア研究報告』（財アジア太平洋センター）Vol.8

中国語

陳 立鵬 2007『中国少数民族教育立法新論』中央民族大学出版社

曹 紅 1999『维吾尔族生活方式』中央民族大学出版社

戴 慶厦 1997『中国少数民族双语教育概论』辽宁民族出版社

戴 慶厦・成燕燕・傅愛蘭・何俊芳 2000『中国少数民族言語文字応用研究』雲南民族出版社

費 孝通 1988（2001）「中華民族多元一体格局」宋蜀華・陳克進主編『中国民族概論』中央民族大学出版社

高 莉琴・張新武等 2006『新疆的語言狀況及推廣普通話方略研究』北京語言大学出版社

黄 家庆 1997『新疆民族学校教育研究』新疆人民出版社

马 问华 1998『新疆教育史稿』新疆大学出版社

-
- 马戎·周星主编 1998『田野工作与文化自觉』群言出版社
王军 主编 2007『教育民族学』中央民族大学出版社
W.F 麦凯·M. 西格恩、1989 严正等译「双语教育概论」光明日报出版社
万明钢 1996『文化视野中的人类行为』甘肃文化出版社
希日娜依·买苏提 2001「民考汉与双语现象」『言语与翻译』第1期61-65页
徐思益等 1997『语言的接触与影响』新疆人民出版社
新疆维吾尔自治区统计局编 2007『新疆统计年鉴』中国统计出版社

Acquisition of Chinese Language by Children from Ethnic Minorities in China

- Language Changes and Enculturation in Xinjiang Urban Areas

Ikko Sakamoto Guljennet • Anaytulla

This paper traces the process of acquisition of Chinese language by children of the Uyghur minority in Xinjiang Uyghur Autonomous region, one of the regions inhabited by ethnic minorities in China. It is especially in the urban area of Urumqi city that contacts between Uyghur and Chinese languages is an everyday reality, so we will center on children from that region in our attempt to regard the actual state of their employment of both languages at school, home and in local communities, as well as the relation between those and the shaping of their identity.

In recent years, an inflow of Chinese language, the language spoken by the Han majority, into various spheres of linguistic activity of Uyghur people has been noticed. The use of ethnic language in education and everyday life in ethnic autonomous regions is guaranteed by the Constitution and other laws, but the increase in inhabitants of the Han majority and the reinforcement of educational policies for the introduction of Chinese language as well as other factors has led, especially in urban areas, to a linguistic environment centered on Chinese language rather than ethnic languages. This paper regards language contacts and the resulting changes in linguistic environment at school, home and local communities as multilayer processes determining the activity domains of children from ethnic minorities, and points at the possibilities that open through the employment of two languages for the identity formation of children and inter-ethnic relations.